

念願の松山—台北線開設へ。

愛媛県や松山市が開設を目指していた松山—台湾・台北間の定期航空路線が7月18日、萌芽から10数年を経て実現する。

地方が競って国際化に取り組む中、松山市は台北市に「松山(しょうざん)区」や「松山空港」があるのを機縁に、2007年から当時の中村時広市長(現・愛媛県知事)が中心となって交流を進め、13年には日本と台湾の「松山空港」を結ぶチャーター便が初めて就航した。翌14年、松山、台北両市は友好交流協定を締結。17年には両市が相互誘客キャンペーンを実施するなど、定期航空路線開設に向けた布石を打ってきた。

愛媛と台湾には不思議な縁がある。

戦前、松山商業野球部で監督を務めた後、日本統治下にあった台湾の嘉義農林学校(嘉農)を率いて甲子園準優勝に導いたのは松山市出身の近藤兵太郎氏。台湾野球の普及と発展に貢献し、2014年に同氏らを描いて映画化された「KANO」は現地でも大ヒットした。台湾の湖「日月潭」に当時アジア最大の発電量を誇った水力発電所を完成させ「台湾電力の父」とたたえられてきたのは西条市出身の松木幹一郎氏だ。

松山-台北間は台湾のエバー航空によって木・日曜の週2往復で結ばれる。松山空港発着の国際線は中国・上海線、韓国・ソウル線に続き3路線目。観光庁の統計では、2017年の愛媛県内の外国人延べ宿泊数は約16万人、うち台湾は5万人超で最多となっている。特に、道後温泉の人気の高い。サイクリングが盛んな台湾の人たちにとっては、海を渡る自転車道も備え「サイクリストの聖地」と呼ばれる瀬戸内しまなみ海道(今治市—広島県尾道市)も魅力だ。これまで高松空港や広島空港を經由し愛媛県を訪れていた台湾人観光客が直接愛媛に入り周遊するケースが増えると期待も大きい。そして、戦前、愛媛と台湾の絆となった2人の先人の功績にもあらためてスポットライトが当たりそうだ。

愛媛新聞社 営業局営業開発部 副部長・伊藤賢司



世界でも例を見ない、同名空港間を結ぶ直行チャーター便 就航5周年記念式典の様。 (松山空港国際線出発ロビー)